

神童寺

神童寺は、閑静な街にある小さな寺院です。ここは、山岳仏教が栄えた地で、神道と仏教の両方の信仰を合せ持つ山岳信仰であり、修験者集団の勢力と影響力が長く続きました。平安時代（794－1185）には、ここが信仰の聖地であったといわれています。本堂は、国の重要文化財であり、裏手の収蔵庫にも、重要文化財である仏像が多数安置されています。神童寺の境内は、四季を通じて美しく、毎年、9月の第2日曜日に、修行者が熱い木炭の上を歩く神童寺最大の行事、護摩焚きの儀式が行われます。

歴史

神童寺の起源については、いろいろな説があり、正確な詳細については不明です。しかし神童寺は、594年から622年の間、日本を統治した、有名な聖徳太子(574－622)によって創建されたと考えられています。聖徳太子はまた初めて、仏教の教えを取り入れた憲法を制定し、仏教を強く支え広めようと努力しました。そして、それらの功績が讃えられ死後に、聖徳太子という名称が贈られました。

675年、神童寺伝説によると、山岳信仰、修験道の開祖とされる役小角が神童寺を訪ね、修行を続けたといわれています。このとき2人の子どもの姿をした神童が役小角の前に現れました。役小角は、その神童に敬意を持ち、日本独自の山岳信仰、修験道の本尊である「蔵王権現」を刻みました。神童寺の本尊とされ、のちに寺号を神童教護国寺と改められました。このように山岳信仰は、この地域に広められ、神童寺は、修験者にとっての要となりました。

平安時代末期（1177－1181）、この地域の多くの建物が兵火により破壊され、神童寺も廃寺してしまいました。しかし、1406年本尊、蔵王権現が祀られている蔵王堂が再建され、現在の本堂として残されています。

明治時代（1868－1912）に日本は工業化された時、日本政府は仏教と神道の分離令を発し、二つの信仰が習合した修験道を廃止しました。第二次世界大戦後、1947 年施行の日本国憲法により、宗教の自由が認められ、修験道の信者は、再び修行の自由を手に入れました。

宝物と芸術品

神童寺は、多くの重要文化財があります。1406 年に再建された本堂をはじめ、収蔵庫に安置されている多数の仏像などです。この収蔵庫は、展示されている多くの崇敬する像により、まるで平安時代（794－1185）の美術館のようです。本堂の裏手の「護摩焚き」所を通り抜け、収蔵庫に入ります。そして「愛染明王坐像」「不動明王像」「阿弥陀如来坐像」「日光・月光菩薩立像」などの像を眺めてみてください。